

(続紙 1)

京都大学	博士 (地域研究)	氏名	Kurniawati Hastuti Dewi
論文題目	The Emergence of Female Politicians in Local Politics in Post-Suharto Indonesia (ポスト・スハルト期インドネシアの地方政治における女性政治家の台頭)		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、1998年にスハルト権威主義体制が崩壊して民主化が始まったインドネシアにおけるムスリム女性政治家の台頭に着目した研究である。世界最大のムスリム人口を抱えるインドネシアにおいて、とりわけ地方政治の文脈において女性リーダーが台頭してきていることは現代イスラームにおける新たな潮流であり、その台頭を研究することは極めて重要である。</p> <p>インドネシアにおいて、2004年の大統領直接選挙に続いて2005年から地方首長の直接選挙が始まると、とりわけジャワにおいて地方首長に選出されるムスリム女性政治家が増えた。本研究は、地方首長に選出された3人のムスリム女性政治家に着目し、彼らの政治的台頭の要因を明らかにすることを目的としている。3人の女性首長とは、ルストゥリニンシ(クブメン県知事、中ジャワ州副知事)、シティ・コマリヤ(プカロンガン県知事)、ラトナ・アリ・レストリ(バニユワング県知事)の三名である。本研究では、文献資料に加え、2009年6月から2010年8月にかけて、中ジャワ州、東ジャワ州、ジャカルタ特別州においてこの3名の女性政治家や100名以上の関係者にインタビューを行った。</p> <p>まず序章では、ジャワにおけるジェンダーと地方政治に関する先行研究やポスト・スハルト期のインドネシアにおけるイスラームに関する先行研究を検討し、本研究が女性政治家の台頭に関する包括的な研究の嚆矢であることを明らかにした。そして、3人の女性の政治的台頭においてジェンダー的側面やイスラーム化が持つ意味を解明することの重要性を指摘した。</p> <p>第1章では、1970年代後半以降のイスラーム化の影響、1990年代中葉の民主化の萌芽、そして90年代末の民主化といった変化がインドネシア政治において女性の台頭を可能にしたことを指摘した。とりわけ、地方首長の直接選挙制の導入は、制度的に女性の台頭を容易にした。</p> <p>続く第2章では、ジャワ人のムスリム女性に対して、日々の振る舞いも含めてジャワ文化やイスラームの観点から規範的に期待されてきたこと、イスラーム化や民主化によるそうした規範の変化を分析した。特に、ジャワで勢力を誇るイスラーム社会組織ムハマディヤとナフダトゥール・ウラマーに焦点を当てた。民主化後、女性が大統領以外の政治職につくことにこれらの組織が反対しなかったことは、ジャワ人ムスリム女性が政治リーダーになる上で決定的に重要であった。</p> <p>第3、4、5章においては、先述した3人のジャワ人ムスリム女性政治家に着目し、彼らの社会的背景、直接選挙での政治戦略、首長就任後の政策について分析した。そ</p>			

の上で第6章において、この3人の女性政治家を比較の視点で分析した。そこから分かったことは、アジアにおいて女性政治家が台頭する上で重要な要素とされる親族的紐帯 (Familiar Ties)、つまり有力な男性政治家との家族関係 (父、夫) だけでは、彼女たちが直接選挙で勝利を収めることは不可能であったということである。また、彼女たちは、女性が地方首長になることをナフダトゥール・ウラマーが認めた事実を積極的に利用した。選挙キャンペーンでは、彼女たちは、夫への貞節を強調して理想的なジャワ人女性像を売り出すだけでなく、ジルバブを被るなど、敬虔なムスリム女性像を演出して、男性候補者とは異なるブランドづくりをうまく行って有権者の支持獲得に成功した。また、選挙戦で勝利する上では、男性主体であれ、女性主体であれ、優れたネットワークを構築して利用することが決定的に重要であった。

最終章は、これまでの章をふまえて次のような結論をまとめた。すなわち、民主化後のインドネシアにおいて、少なくともジャワに関して言えば、地方首長になるムスリム女性が現れてきた。彼女たちは、ジャワ文化やイスラームで理想とされる女性像を積極的に打ち出し、優れたネットワークを構築して首長選で勝利をおさめることができた。有力な男性政治家との親族的紐帯は重要ではあるが、それだけでは選挙戦に勝つことは出来なかった。本研究が提示したこのような点は、ジェンダーの視点を取り入れたからこそ明らかにできたのであり、これまでのインドネシアの地方政治研究が明らかにしえなかった点である。また、通念と異なり、イスラーム化はインドネシアにおいて女性の政治進出にとってプラスであることも明らかにした。

(論文審査の結果の要旨)

インドネシアでは、32年間続いたスハルト権威主義体制が1998年に崩壊して民主化・分権化が始まった。その結果、政治的自由が一気に拡大し、女性の政界進出が進んだ。とりわけ、2005年に地方首長の直接選挙制が導入されたことで、インドネシアの中心であるジャワにおいて正副州知事、正副県知事・市長などの正副地方首長になる女性政治家が現れた。本論文は、まず、ジャワにおけるジェンダー研究、インドネシアにおけるイスラーム化についての研究、民主化・分権化後の地方政治研究を網羅的にレビューした。その上で、ジャワにおいて地方首長になった三名のムスリムの女性に焦点を当て、彼女たちがどのようにして地方首長になることができたのか、地方首長になってからどのような政策を実行したのかを実証的に分析した。本論文は以下の点で高く評価できる。

まず何よりも、数多くのインタビューと資料収集・分析を通じて、三名の女性政治家の社会的背景、地方首長選出馬の動機、そして、地方首長選でのネットワークづくりを含めた選挙戦略を詳細に分析した点は実証的研究として学術的に高く評価できる。民主化後の女性の政界進出についての研究がまだ極めて少ない上に、地方首長選に出馬した女性についての先行研究は、本論文でも取り上げるルストゥリニンシ女史に関する一本だけだったと言って良い。そうしたなかで、三人の女性首長について比較の視点を持って実証研究を行ったことは世界でも初めての試みである。

第二に、実証研究に基づいて、有力な男性政治家との親族的紐帯が女性の政界進出にとって極めて重要であるという固定観念を批判したことである。少なくとも一人の女性首長は、そうした紐帯を持たずに首長選で勝利しており、他の二人についてもそうした紐帯は首長選で勝利するための一つの要素でしかないことを実証した。むしろ、重要なことは、いかに自らハブとなり、あるいはハブに当たるような有力者、とりわけイスラーム指導者にアプローチして、広く、そして緊密なネットワークを作り上げるのか、そして、有権者にどのように候補者としての魅力をアピールするのかであるとした。

第三に、インドネシアにおけるイスラームとジェンダーについての新たな観点を提示したことも高く評価できる。70年代後半から進んだイスラーム化について、西欧の研究者からはジェンダーの観点から否定的に評価する意見がある。しかし、本論文は、調査対象である東ジャワ、中ジャワで有力なイスラーム社会組織であるナフダトゥール・ウラマーにおいては、女性が地方首長になることを否定していないためであるとした。加えて、三人のムスリム女性が地方首長選で勝利できたのは、ムスリム女性としての敬虔さを積極的に打ち出したためであると主張した。イスラーム化のなかで、ムスリムとしての敬虔さが女性の政界進出にとってプラスであることを説得的に示している。

第四に、これまでのインドネシアの地方政治研究とは異なる視点を導入したことである。これまでの研究が、分権化にまつわる制度の研究や金と暴力に焦点を当てた実

証研究が多かったのに対し、本研究ではジェンダーの観点を取り入れたことで、女性にとっては、地方政治は政治参加の重要な場となってきたことを明らかにできた。

以上の四点から、本研究はインドネシアの地方政治研究における画期的な成果である。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成 24 年 2 月 6 日、論文内容とそれに関連した事項について試問した結果、合格と認めた。